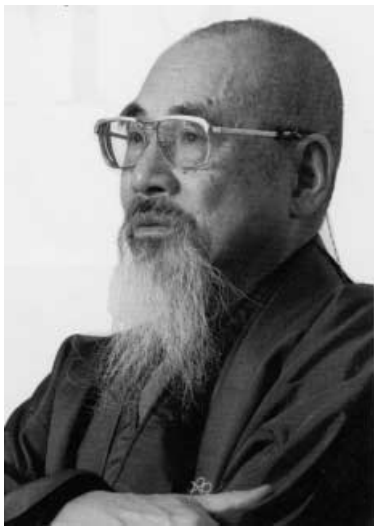


FAITH

キリスト教と仏教の共通の根拠(2)

一禅者からキリスト教徒への提言

スイス・ツークで開催された第1回キリスト教・仏教
対話集会における講演(1994年7月)より抜粋



秋月 龍珉

あきつき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧。

著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。

Vol.14承前 (二)

さて、私は青年時代に洗礼を受けてプロテスタントになり、今日禅匠(ゼン・マイステル)として世に立つにいたるまで、多年にわたり自身のうちで、またキリスト教神学の友人たちと、「キリスト教と仏教の思想的対話」を真剣に続けてきました。その結果、一見相異なる両教に、何か宗教的な「共通の根拠」のあることが最近見えるようになりました。私はそれを皆さんに語って、批判を得たい。そのためにはるばる日本からスイスまで訪ねて来しました。

確かにキリスト教と仏教は違います。キリスト教は「始め

に神が天地を造った」という。そしてその神の支配が天になるように地にもならんことを期する宗教です。それに対して仏教は、開祖釈尊その人が無神・無靈魂の立場に立っています。仏陀は人生苦の解決に神をもちださず、救われるべき靈魂の実体を否定して、無我を説きました。彼は神の支配を説かず、業による因果の道理を説きました。縁起縁生の説です。

このように相異なる両教ですが、「共通の根拠」があることをこれから申し上げます。私は宗教者としてキリスト教から深く学びました。第一に「真の神を知らない者は、必ず偶像をもつ」(ガラテヤ書4:8、イザヤ書44:17~23、出エジプト記20:3~6)、第二は「真の神を見た者は死ぬ」(イザヤ書6:5、出エジプト記33:20)です。私はこの二つのテーゼを私の禅仏教に当てはめてみました。その結果、次のようなことが明らかになりました。

「真の神を知らない者は必ず偶像をもつ」—禅仏教は偶像をもってはいないか。こう考えた時、私の心耳に禅匠黄檗(?~856?臨済義玄の師)の次の語が響きました。「諸仏と一切衆生と、唯だ是れ一心にして、更に別法なし」(伝心法要一)。「もし仏を觀じて清浄・光明・解脱の相を作し、衆生を觀じて垢濁・暗昧・生死の相を作さば此の解を作す者は、河沙劫を歴るも、終に菩薩を得ず。相に著するが為の故なり。唯だ此の一心のみ、更に微塵許りの法も得べきものなし。即心是れ仏なり。如今、学道の人、此の心体を悟らず、便ち心上に於いて心を生じ、外に向かつて仏を求め、相に著して修行す。皆な是れ悪法にして、菩薩の道にあらず」(伝心法要一)。「仏陀たちとすべての衆生たちとは、ただ[一心]だけであって、そのほかのものは全くない」。「もし仏について清らかな輝いた、解脱の相を思い描き、衆生について汚れ、愚昧な生死流転の迷いの相を見て取るならば、そんな理解をする人は、未来永劫ガングス河の沙の数ほどの時を重ねても、結局菩提を得ることはできない。それは[相]に執われているからである。大事なのは、ただこの[一心]だけであり、そこには塵ひとつほども把み得る法はない。この心そのものが仏である。それなのに今日、修行者はこのような心の本体

を悟らず、その肝心の一仏心の上にもう一つ本心という相を生じて、それを目ざして外に向かって仏を求め、相に執われた修行をしている。みな邪悪なやり方であり、菩提の道ではない」。

ふつうには一方に迷っている衆生がいて、他方に悟った仏がいる。この迷った衆生が修行して悟って仏（覚者）になるとするのが仏教であると考える。しかし禅者はいう「そんな仏もない、衆生もない。あるのはただ〔一心〕だけだ。そのように仏を、悟り・清浄・光明・解脱と見、衆生を汚穢・暗昧・生死と見るのは〔相〕に執われるからである。そんな見方で修行するのは邪悪なやり方で、そうした修行では永劫菩提は得られない。大事なものは〔一心〕だけである。その外の法など微塵ばかりも得られるものはない。ほかならぬこの心こそが仏である。それを見ないで別に外に理念を立てて、相に執われた修行をするな。そんなのは菩提の道ではないぞ。仏だとか衆生だとか考えているのは、凡夫の描いた〔相〕にすぎない、そんなものは実際にはどこにもありはしない。あるのはただ〔一心〕だけだ」。だから禅仏教は、ただこの一心だけを直指人心するのである。

ここまでくれば、正統派キリスト教の信条「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同（クレド）の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体（ヒル）のよみがえり、永遠の生命を信ず」のほとんどの神観・人間観が真の神とは異なる「相」、すなわち偶像ないし“神話”であると批判されるべきではないか。

（三）

しかし、異なった思想伝達の背景を有する仏教の「仏」と「衆生」の語をそのままキリスト教の「神」と「人」に対応させるのは、いささか乱暴であろう。そこで私はこの個人存在、インド人のいうアートマン、近代西洋人にいう自我を宗教哲学の術語として、個（The Individual）とし、神や仏を超個（The Trans-Individual）と称することにする。そうすると、先の黄檗の語は「単なる超個もない、単なる個もない、あるのは一息に超個の個だけだ」ということになる。そこで、この「一心」すなわち「一息に超個の個」なる実存の原事実を聖書の中に探ると、「インマヌエル」（神、我

らと共に在す）ということになろう。インマヌエル、これが黄檗の「一心」、私の「一息に超個の個」という人間実存の原事実である。

ここから見ると、神というも人というも、「相」にすぎない。このインマヌエルの原事実に触れてこそ、人は真の神に逢う。そのときにのみあらゆる偶像が姿を消す。

哲学者滝沢克己は、このインマヌエルという「神と人の接触」に、第一義の接触と第二義の接触を区別し、その間に「不可分・不可同・不可逆」の区別と統一があると主張した。神と人との第一義の接触とは、あらゆる人の自己成立の根底に無条件に直属する、インマヌエルの原事実のことである。しかし我々人間は通常この事実を目覚めていない。人間がこの原事実を目覚める出来事が、神と人の第二義の接触である。ここに宗教的生が成立する。滝沢によると、仏教もキリスト教も、ともに第一義の接触に基づく第二義の接触の異なる形であり、ここに両者が対話に入り得る「共通の根拠」があるという。

それなのにこれまでキリスト教は、この二つの接触の区別をイエスにおいて明晰に追考しなかった。イエスは第二義の接触を典型的に成就した一人の人間なのに、伝統的キリスト教は、イエスによって第一義の接触そのものが成り立つかのように誤解した。いやむしろイエス自身が第一義の接触そのものとした。こうしてイエスは「唯一の啓示＝救済者」となり、ここにキリスト教の絶対性が成り立つ。しかしその立場に立つ限り、他宗教との対話は道を断たれることになってしまう（道者いわく、それだけに第二バチカン公会議の決定以後の諸宗教間の対話路線は貴い）。他方仏教はこのような自己絶対化には陥らなかったが、しかし第二義の接触にすぎない人間的な「覚」を一切の判断の基準にすることによって、それを第一義の接触の上に置く誤りを犯してゐる（道者いわく、禅者はともすれば本末の無我であるべき仏法を、大我禅に墮してしまふ）。

滝沢は、私への私信では接触という言葉を使わずに「一」と言った。鈴木大拙のいう「東洋的一」の「一」である。また第一義の接触と第二義の接触の話を、仏教でいう「本覚と始覚」に相当すると見てよいかと、西村恵信が問うたとき、滝沢ははっきりそれを肯定したという（第一回東西宗教交流学会）。さらに滝沢は、「神と人との第一義の一」と「第二義の一」について、重要な内容規定を与えた。それは「第一義の一」と「第二義の一」の関係は、不可分・不可同・不可逆であり、また第一義の一における神と人の関係も、同様に不可分・不可同・不可逆であるというのである。

（続く）